

## 農業経営者ルポ

文 牧瀬和彦

# 「この人この経営」第13回

ちゃんとした土づくりで、世間に通用する経営を

## 田中正保さん (48歳)

〒680-0426

鳥取県八頭郡家町大字下坂442

TEL 0858(72)2826

FAX 0858(72)2827



### 【プロフィール】

(有)田中農場代表取締役。農業高校卒業後、埼玉県種畜牧場で養豚の研修を一年した後、実家に戻り、母豚40頭の一貫養豚を行う。また、1976年より自作地に加え水田を借地ではじめ、1982年には13haとなり、雇用による稲作経営に転換する。

1996年に農業生産法人・(有)田中農場を設立。現在、水田68haにて水稲、麦、大豆、小豆等を生産・加工販売。

とにかく「土づくり」をしています

鳥取駅から約10キロ、山間の川沿いの郡家町。約2,500世帯、農家戸数約1,500戸、専業農家約100戸。田中農場は、ほとんどを借地で水田稲作を行っている。しかも、兼業化率が高いこの町の水田面積の約10%を田中農場が活用している。

1976年から借地をはじめ、1982年には水田借地13haとなり、本格的な稲作経営をはじめた。しかし当時の高米価維持と引き替えに転作という名の減反をしなければならず、稲作経営としては厳しい時代でもあった。

構造改善事業による圃場の再整備も進む。しかし整備した直後の水田ではまともな稲作は出来ない。しかも減反もある。

田中さん達は、それでも水田を借り、自ら進んで転作を行った。

「米価はこのまま上がり続けるはずはない」「いつか頭打ちになるし、下落するだろう」その時までは、とにかく「土づくり」をしつかり行う。

いずれ米価が下がる時がチャンスだと、圃場整備後の水田で、転作作物の麦や大豆を作りながら、堅くなった水田をほぐし、石礫を取り、排水を良くし、堆肥を入れることを行ってきた。

田中さんの努力もあって、郡家町の減反達成率は100%を大きく上回った。しかし、麦も大豆もしっかり獲れることはない。

「よく言われましたよ「獲れもしない麦を何故植えるのだ？」と。本気で「共済金目当てじゃないのか？」と言われたこともありました」「しかし私は「獲れないからと言って、植えなければいつまでも獲れるようにはならないだろ？」と目の前の増収技術には走らず、土づくりを主眼にやっていました」と田中さんは笑う。

田中農場は、今でも町内の畜産農家からの堆肥は全量引き取って堆肥として圃場に入れている。

### 通用するものは必要とされる

「コメ作りは無くなりはしませんよ。だからちゃんとしたコメを作らないとならないのです」

今までの情性で稲作をするのではなく、ちゃんとコメの将来展望を見据えた上で、コメ作りをはじめた。

日本の食生活では、よほどのことがない限り、コメは食べ続けられるだろう。しかしその内容は変わることもある。「そのために、ちゃんとしたコメ作りをする、作物がちゃんと生育できる環境を作ることが、あの十数年間で

した」「ちゃんとした土づくり、条件づくりをしてやれば、ちゃんとしたコメが育つんです」

ちゃんとしたコメとはどのようなものなのか？。田中さんは例え話をした。体重60キロがベスト体重の人が居たとする。しかし不摂生がたたると100キロになることは容易だ。そうすると、身体各所に不都合が出てくる。

糖が出たり、血圧が高くなったり…。薬剤で血圧や糖を下げれば良いというのも一つの考え方ではあるが、本来の問題は異常な体重にあることは明白だ。

体重がちゃんとしていないから、薬や医療に頼らなければならぬ身体になるのだ。

対処療法で、血圧や糖尿の薬を作ることもそれは大切なことなのだが、ベスト体重で、健全な身体を維持する、そんな生活様式を継続することの方がはるかに大切なのだ。

田中農場の稲作は、有機肥料を中心に、最小限必要な場合に限り薬剤も使う。完全無農薬を目指している訳ではない。また、肥料設計や増収技術もそれほど重きを置いては居ない。

「無農薬・減農薬とあまり神経質になりすぎても現実的ではありません」もちろん、無用に農薬をかけて「安全

です」と口を拭いているわけではない。「最低限の農薬も、必要なら使います。でも、土づくりをちゃんとやってやれば、ちゃんとしたコメは獲れるはずなのです」作物が健全に育っていれば、病害虫のリスクも少ないのだ。

### ちゃんとしたもの

ちゃんとした食料とはどんなものなのだろうか。

「まず第一に、美味しいということ

です。美味しいものでなければ喜んで食べてもらえません」ちゃんとした生産をしなければ、美味しいものは作れないし、喜んで買ってもらえない。

「第二に、最終消費者だけではなく、中間の加工、流通の人達にも喜んでもらえるものでなければなりません」

「食堂でご飯を食べたお客が『美味しかったです』と言ってもらえることが食堂の喜びであり、流通業の喜びなのです」

書かれている。

「無農薬・有機栽培の話も同様なのですが、まず美味しい、喜んでもらうコメでなければちゃんとしたものとは言えないです」「美味しく喜んでいただき、さらに栽培方法をお聞きになる方には、『最低限の農薬も使いました』と具体的なことをお話しします」

ちゃんとした作り方をすれば、美味しいし、それを納得して喜んでもらうことが「ちゃんとした」コメ作りなのだ。

### ちゃんとした農業経営

田中さんからは「作物がちゃんと生育できる環境を作ってやること」という言葉が何度も出てくる。

これは作物だけでなく、『経営』にも言えることのようなのだ。

雇用者の冬季の作業の中心は農機具の点検であるという。「うちのスタッフは徹底的に農機具を修理できます」もちろんプロの修理を依頼してもいいのだが、その分コストをかけても、機械を使う自分たちで手がけるといふことに大きな意味がある。

大抵、農業機械の故障は農繁期の作業が立て込んでいる時期に起きるものである。その時期はプロの修理屋も忙



自家製のもち米・豆を使った手搗きモチ

現在、50haの水田で、コシヒカリ、あきたこまち、ひとめぼれ等のご飯米と、酒米、もち米を作付けし、転作には大豆、小豆、ソルゴ等を植えている。

収穫したコメは、自分で保管・精米を行い、関東をはじめ全国に販売している。

販売先は大部分が食堂等の大口。宅配での販売は20%程度だ。

もち米は自分達で搗いてパッケージし、酒米は酒蔵とタイアップして「田中農場米使用」とラベルに



モミのままフレコンに入れて保管してあるコメ

田中農場では、大馬力のトラクタと深耕ができるプラウを使用している。「北海道でもあるまいし、鳥取の山奥でどうしてこんなに大きなものが必要なのか？」と機械屋さんに不思議がられた。

プラウ耕作業にも適期がある。ましてや面積が大きくなれば、効率的な、消耗の少ない、しっかりとした機械装備が必要である。

そしてこの4月には、一部の圃場に、試験的にレーザレベラーで均平を取ってみた。

サブソイラー、プラウ耕によつて作物の根の張りを良くすると共に、深水管理が可能となる。そして何よりも、均平が取れたことにより、ロータリー耕、代かき作業を半減させるのが狙いだ。

田植えまでの短い作業期間に、効果的な作業体系が組めるはずだと田中さんは目論んでいる。

現在、家族と社員、臨時雇用も含めて10人体制。繁忙期には、臨時の雇用にオペレーターも雇い入れる。学生アルバイトも入れる。

全ての作業に卓越する必要はない

のだ。代かき作業が得意な人、田植機なら任せると言う人、当初は苗箱運びしか出来ないが、徐々に仕事を覚えて行く人。

全員が全ての作業にオーソリテイーでなくとも良い。活かせる場を提供し、そこで能力を発揮し、次のステップに向けて力を蓄えればよい。

「適材適所」「適期適作業」使い古されてはいるが、いつでもつきまとうこの言葉が思い浮かぶ。

農業後継者が少ないことの杞憂に対して、田中さんは言う。

「農家の子弟でも、農家以外からの参入者でも、最初は『農業後継者』でしかありませんよ。ね。まだ『農業者』の入口に立っただけです。通用するはずがありません」

「農業後継者がそのまま『農業経営者』になると思つたら間違いです」「それぞれが、しっかり経験を積み、技術を習得し、やつと『農業従事者』になるのです。『経営者』になるの

はそれからの話です」

「実は『簡単なこと』をやっているんです」と笑う田中さん。

ちゃんとした条件を整えて、を手助けしてやれば、作物でも、人でも、機械でも、その力を発揮できるのだ。

### 時代の変化に対応できる「ノウハウ」を

「でも、農業って最高の業種ですよ」と田中さんは事もなげに言う。

しくなるので、突発の故障にすぐ修理に来てくれるとは限らない。時には部品待ちで2日間も作業を行えないということもある。

自分たちで修理のノウハウを修得していればそのようなリスクを回避できる。絶対に逃せない作業適期に対応するためには、修理屋の手が空くのを待つてはいられないのだ。

冬季のスタッフの人件費が、繁忙期にそれ以上のメリットをもたらせてくれるのだ。



20年近く使っている畑作プラウ。石が多いため、このくらいの大きさがないと耕すという意味合いで土づくりはできない

ちゃんとした条件を整えてやることさえすれば、作物も、経営も、しつかり世間に通用するものになっていく。

しかし、その当たり前の事を行うための苦勞は並大抵のものではなかったはずだ。「十数年かかった土づくり、そそぎ込んだものを、やつと今になって、少しずつ回収しているようなものです」

日本の稲作の展望を尋ねてみた。  
田中さんは言う。

「コメは無くなりはいけませんよ」食料を作ることは絶対に無くならない。そして美味しいものを食べたいという欲望も決して無くなりはいないのだ。「10日分の食費を一食につき込んで、もう次の日にはやはり腹は減るので、それから」だから、ちゃんとした食料を供給していくのが、農業経営者の使命だ。

しかし状況はどんどん変わる。環境も、条件も、マーケットも変わっていく。変化していくことが当たり前なのだ。その中で、自分の経営をどう対応させ変えていくのか。通用する経営とはそういうことなのだろう。

「もし、万が一、うちがコメを作り続けることが出来なくなつたとして

も、きつとうちに代わる誰かがコメは作ります」

「しかし、変化があつたとしてもそれに対応して、自分も変わっていくことが必要ですし、その覚悟と準備を私は経営の課題としてしています」

今は、コメは味や品質を問われている。しかし、大冷害などでコメの絶対量を要求されるような場面になれば、田中農場はそれに対応できる準備は出ている。

「ここまではしっかりと土づくりをしてきましたから、1割、2割の増収の余地はまだまだ残っています」

酒米への取り組み、もち米、大豆や小豆を活かした加工食品の開発。レーザーレベラーによる春作業の効率化のメリット…。これらが田中さんの言う『対応』の準備なのだ。

考えると、田中さんは、十数年前から、減反政策により作付けが出来ない水田を、しかも圃場整備直後の痩せて堅く、石がゴロゴロしている水田を借り受けていた。そして「このままでは続かない」と信じ、土づくりに邁進していた。『変化』に対応するための『土づくり（基盤作り）』をしていたのだ。

決して、現在の状況に満足してあぐらをかくのではなく、弛まぬ努力と研究をして、変化の動向を確かめ、それに対する準備を続けているのだ。

田中さんは言う。「私は10年かかって『土づくり』をしました」「その経験とノウハウを活かせば、今なら3年で出来るのです」

『土づくり』とは、単に、圃場の土壌のことだけを指すのではない。『経営』の基盤や、ポリシー、手法を整備することにも当てはまるのだ。

経営規模の大小の問題では無い。もちろん作目の違いでもない。

農産物を作る、経営をするということとは、「ちゃんとした食料」を「ちゃんとした経営」で作り続けるということなのだ。

さまざまな経営環境の中で、眼前の事をするべきなのはもちろんだが、変化を見据え、その時に自分は何の道を進むのか、そのために必要な準備はどんなことなのか、どのような目標と予定を持ち、どのようなものを提供できるのか。

「ちゃんとした経営」とは、このようなことを明確に意識して、継続することなのである。まさに「世間に通用する農業、世間に通用する経営」なのだ。  
(牧瀬和彦)



ポット苗による田植え。プラウ耕、鎮圧、ロータリー耕、代かきがつかり出来ている